

茅野市八ヶ岳総合博物館の市民研究員

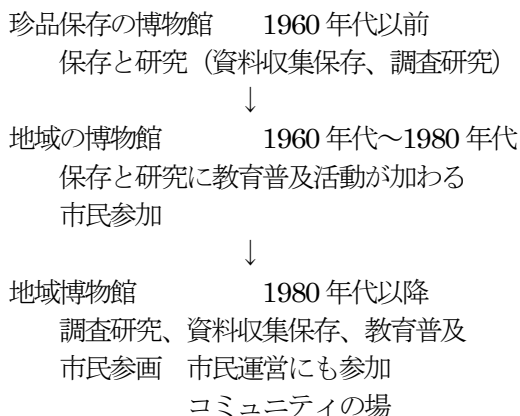
若 宮 崇 令²

はじめに

博物館、美術館が林立する諏訪地域にあって、茅野市八ヶ岳総合博物館はその名の通り人文、歴史、民俗、自然を扱う総合博物館である。特筆すべきは諏訪地域にあって唯一自然を扱っている博物館であるということである。したがって博物館である以上、諏訪地域の植物等自然に関する調査研究、標本等の資料収集と保管、そして自然に関する教育普及活動という博物館活動が期待されている。しかしこの博物館活動を推進するのは学芸員であるが、国立や県立の博物館のように各専門分野の学芸員が配属されているわけではない。1~2名という少ない学芸員が全分野を担当することは無理である。だが、周囲から博物館としての活動は期待される。そこで特筆されている自然分野の調査研究、資料収集保管、教育普及という博物館活動を市民の力を借りて活発に推進しようと、市民に支えられ、高められる博物館をめざして2013年度より市民研究員養成制度を導入した。この市民研究員養成は3年毎に見直しをすることにしており、現在8年が経過し、4月より9年目、第3期のまとめの1年の活動に入るが、この活動の初期の舵取り役、旗振り役を務めさせていただいたので、これまでの活動について記すとともに、地域博物館としての今後の展開についての私見を記す。

1 これからの博物館

まず、日本の地域博物館について考えてみたい。我が国の博物館の変遷を振り返ってみると、概ね以下の様な変遷をたどってきている。



バブル期に地域に博物館が多く建設され、博物館には珍品を目玉にする博物館と地域史の解明、地域文化の向上、地域の環境保全など地域に根ざした活動を行な

う地域博物館という2つの流れが生まれた。1988年に開館している茅野市八ヶ岳総合博物館は珍品を目玉にする博物館ではなく、地域博物館として誕生している。変遷を眺めて注目すべきは、博物館の機能は時代とともに拡大されているが、基本は地域の資料であり、地域の調査研究であり、教育普及であるということ、その博物館の基本に人材育成や地域の課題解決等の機能を新たに付加し拡大してきているということである。そこで今後の我が国の博物館はどのようになっていくか、どのような機能拡大が望まれるかを見据えながら総合博物館を運営していくことは重要なことである。

我が国のこれからの博物館は、おそらく今まで拡大されてきた機能である市民参加の意義と効果を維持しつつ、博物館の原則に立ち返り地域社会に新たな価値をもたらす文化、情報、人材の集積所としての機能が求められる時代になると考えられる。とするならば、まず博物館に保存されている、あるいはこれから保存する博物館資料の利活用を通じて地域の価値を向上させることが望まれることになる。また、地域をより理解し地域の課題解決への貢献が求められる。更に他の博物館、教育機関、地域内企業、組織との幅広い強い連携が求められ、幅広く奥の深い博物館活動が求められることになる。このような時代のニーズに応えるには、地域の課題を解決する研究や担い手の育成、また地域の資料、文化に関する情報の収集と幅広い公開発信が必要である。また、地域密着性を向上させるためにアウトリーチ的な、活発な出前博物館の展開も求められると予想される。そしてそれらを産学民官が連携して推進することが求められる。これらの新たな機能を付加したこれからの地域博物館は、2001年に出された文部科学省の博物館運営指針「市民と創る新しい時代の博物館」に集約されている。したがって今後の地域博物館として求められる活動をまとめると次のようになる。

21世紀の地域博物館

調査研究、資料収集保存、教育普及
市民参画 市民運営にも参加
コミュニティの場
地域社会に新たな価値創造の拠点 情報、文化、
人材の集積所
双方向の情報ネットワークと出前
他業種との連携（産学民官）

2 求められる具体的事業

将来を見据えて付加される新たな機能を具体的事業

²元八ヶ岳総合博物館館長 市民研究員

として展開は次のようになる。蓄積している博物館資料の活用、景観や自然破壊等の地域課題の解決、活動をより推進するための他施設や組織との連携、地域の文化や資料についての情報の公開と発信、そして館に留まっていない活発なアウトリーチ的活動。およそこのような事業展開が茅野市八ヶ岳総合博物館に求められるのではないかと考える。

博物館資料の活用	資料に光を当て、地域価値を向上させる	地域価値についての学習及びPR, 情報発信
地域課題の解決	地域課題解決の手法研究および担い手の育成	大学等教育機関との連携、市民研究員の養成、分野の拡大博物館を支える会
他施設、組織との連携	幅広く奥の深い博物館活動	連携への働きかけ 連携事業の計画と実施
地域資料、地域文化に関する情報の公開と発信	地域資料、地域文化に関する調査研究と資料・情報収集とデジタル化	独自のHPを使った双方向の情報発信 地域価値の発信と向上
活発なアウトリーチ的活動	地域密着性の向上	出前博物館事業 市民研究員 博物館を支える会

3 市民研究員について

このように従来の博物館活動に加え、地域に根ざした活動をする地域博物館に期待されるものは大きくなってきている。その期待に応え、地域博物館としての存在価値を一層高めるための一段階として導入したのが市民研究員である。市民に博物館活動に有機的に関わってもらうことにより、博物館活動の活性化を図ると同時に、市民のその関わりをやりがい、生きがいにしてもらおうというものである。市民の力を借りた博物館活動と言っても、オールマイティに力を持っている市民ばかりではない。また、博物館活動で何が重要かということを知っている市民は意外と少ない。博物館とは古いものがあるところというイメージしか描いていない人が多い。まず、博物館の使命を知ってもらい、いろいろな分野に力をつけた市民を養成することから始めなければならない。しかし、養成し終わってから博物館活動に参加し、力を発揮してもらおうというのでは時間がかかりすぎる。そこで養成を兼ねながら調査研究、資料収集保管、教育普及という基本的な博物館活動も推進

するという手法を取り入れたのが市民研究員である。つまり、ある分野の専門家、例えば植物分野の専門家に市民と一緒に地域の植物相を調査してもらい、現在の地域の植物相の目録を標本と一緒に博物館に残す作業を依頼する。参加した市民は、この調査、資料収集保管という活動を通して調査研究とはどういうものか、なぜこのような博物館活動が必要なのかを学びながら、植物についての同定力を高め標本作成の力をつけてもらおうというものである。市民に実践的活動をとおして植物分野の力をつけてもらい、つけた力を調査研究ばかりでなく教育普及という博物館活動にも発揮してもらおう、また、その力の発揮場所を博物館で用意しようというのが市民研究員を養成する事業である。市域にはいろいろな分野で様々な経験をし、様々な力を持った市民はたくさんいる。その力をもっと役立てたいと思っている市民は大勢いる。また、今までその分野について興味があったが、学ぶ機会も時間もなかった。これを機会に学んでみたいと考えている市民も大勢いる。そういう市民の学びの場、力の発揮場所、市民が汗した資料の集積場所となるのが、地域に根ざした博物館である。参加することにより市民の輪が広がり、博物館は市民のコミュニティの場となる。博物館の宝は収蔵資料であり、収蔵資料なくして博物館とは言えない。その収蔵資料は現在を語り過去を語る貴重な資料である。その貴重な地域資料をどれだけ収蔵しているかで博物館の価値は決まる。永遠に残る貴重な資料を残すという博物館活動によるこんで携わること、社会貢献することに市民はやりがい、生きがいを感じてもらおう。まさに学びを実践に結びつける、生涯学習を生涯活動に結びつける場が博物館になるのである。このように市民にとっては学びと貢献であるが、市民に支えられた活動により博物館活動が活発になり、博物館として高められることをねらったのが市民研究員事業である。第1期から第3期で実際参加された市民の構成を見ると男女比はほぼ半々の5:4、年齢は60歳以上の高齢者が7割近くを占める。分野によっては学生や会社員等勤労者が多いものもあるが、多くは自由な時間を持つ人が多い。応募の動機を聞いてみると、今まで興味があったがなかなか勉強する機会がなかったのでこれを機会に勉強したい、今までの勉強をもっと深めたい、勉強や経験等でその分野の力を培ってきたのでその力を社会のために発揮したい、その分野に興味を持っている人と知り合いになり一緒に活動したい、勉強して孫に花の名前を教えてあげたい等々であった。

4 市民研究員の事業展開

いくつかの分野で指導者を依頼し、参加市民を募集して1ヶ月に1回のペースで活動することを基本にした。漠然とダラダラ事業展開するのではなく、区切りをつ

けた事業展開が必要と考え、3年間活動したら区切りをつけ、3年間の活動成果をまとめるようにし、その間一定の基準を満たした活動をした市民にはその分野の市民研究員認定証を茅野市教育長名で授与するようにした。参加市民の募集は高校生以上とした。しかし一度参加しても家庭の事情、健康問題等各種事情により継続が困難になることがあるので、いつまでも活動を継続できるとは限らない。そこで1期3年とし、3年が終了すると一度参加登録を解消するようにした。そうしないと登録しているが活動できない幽霊会員が増え、実態がつかみにくくなるからである。もちろん期間中いつでも入退会できるようにした。開設する分野については継続、蓄積が重要な博物館であるが、1期3年が終了すると、指導者の都合やその分野の参加市民が都合で参加者が無くなる等、分野の継続が不可能になる場合がある。そこで1期3年とし、3年毎に次期に継続できるか、新たに新分野を拡大できるかを検討し、推進するようにした。依頼した専門の指導者と市民が活動するとはいえ、博物館の事業である以上職員が関わらなくてはならない。絶対的に少ない職員数で開設する分野数を増やすわけにはいかない。しかし、調査研究、資料の収集保管という博物館活動は、分野を拡大し、標本資料を蓄積すればするほど総合的価値が高まるものである。そこで1期終了時に次期にその分野を継続できるか、新たな分野を増設できるかを検討し、次期の活動を展開した。前述のように1期終了時に参加市民は全員一度解散し、次期の始めに次期開設分野の参加市民を大募集し、継続する人、新規参加者も含め新たに参加登録をしてもらうようにした。また、3年間の途中でも新たな参加者を誘うため、その分野の活動を紹介する観察会や学習会を年に1回以上、分野ごとに計画してもらった。さらに、茅野市八ヶ岳総合博物館では年度末に、博物館に関わる市民の1年間の活動を紹介する「活動展」を開催するので、そこに各分野のブースを作り、市民研究員の手で分野ごとに1年間の活動内容をまとめたものを展示し、広く一般市民に市民研究員の活動を紹介するようにした。その展示を見て参加登録する人もいた。1期終了してもさらに学習を深め、力をつけたいという熱心な市民が多く、次期にその分野が継続されると殆どが再登録し、学習を深め専門的な力をつけていった。それに伴い指導者を中心にした同好の輪が広がり、博物館が市民の活動の場でありコミュニティの場となり、多くの市民研究員により博物館は活性化した。また、各グループが毎月1回以上の活動を行うことにより、市民研究員の年間の延べ活動者数は1000～1500人になった。これだけの人数が毎年、茅野市八ヶ岳総合博物館の調査研究、資料収集保管、教育普及という博物館活動に関わり推進してくれていることになる。

5 これまでの分野（グループ）と活動概要

茅野市八ヶ岳総合博物館では年度末に年間の活動報告を兼ねた紀要を毎年刊行している。各分野の年々の活動報告は成果を含め紀要に掲載されているので参照していただきたい。ここでは各グループの活動概要と、第1期から第3期までの変遷を記す。

(1) 第1期 2013～2015年度

植物、陸水（ミジンコ）、菌類（きのこ）、野鳥、実験工作の5分野を開設した。60名の市民が参加登録をし、活動参加率と提出レポートで審査し、約半数の36名に市民研究員の認定証が授与された。審査には各分野の指導者と館長が当たった。

植物グループは茅野市域を中心にした八ヶ岳山麓の植物相を明らかにすることと、その証拠となる標本作成を目標とし、指導者として植物研究家の名取陽氏、諏訪教育会植物部会の岩波均氏、武居三男氏、白鳥保美氏の4名に依頼した。初めなので、諏訪地方の植物に広く親しみ、その分類・植相・生態を中心にした地域の植物誌を広く総合的に知るというので、小泉山、吉田山、守屋山、霧ヶ峰、阿弥陀岳等の植物を観察調査し、採集した植物のさく葉標本を作成した。植物グループに登録し活動した市民は29名、3年間の延べ活動人数は390名になった。

陸水グループはあまり注目されていないが自然界の生態系では重要な役割をしているミジンコについて学び、主に身近な水田のミジンコについて調査した。水田のミジンコの種類はかなり明らかにされているが、それらの生活史についての報告があまりないので、それを明らかにしてみよう。そこから諏訪地方の水田のミジンコについて新知見が得られるかもしれない、それを市民の手でやろうということで、指導者として信州大学教授花里孝幸氏、信州大学大学院君島祥氏の2名に依頼した。このグループに登録し活動した市民は6名であった。指導者からミジンコについて講義を受け、諏訪湖のミジンコや白駒池のミジンコを実際に採集し、ミジンコについて学んだ。実際に飼育もしてみた。そして水田に水を張る5月から水を抜く9月初めまで、毎週1回時間をきめて2箇所の水田で定量的に採集を行い、採集されたミジンコの種類を調査した。結果、藻など植物をえさにするものからミジンコなどを餌にする動物性に変化する水田内のミジンコの変動の様子が水温、日当たりとの関係と関連付けて明らかになった。

菌類（きのこグループ）は、きのこは食べることができるということで注目されているが、食毒ではなく科学的にしっかりきのこについて学び、茅野市域だけではなく諏訪郡内のきのこ相を明らかにし、そのデータと標本を博物館に蓄積しようと、指導者として菌類懇話会の小山明人氏に依頼した。きのこグ

ループの登録参加者は18名であった。毎月1回の活動を基本とし、午前中は野外での観察採集をした。午後は博物館で顕微鏡の特徴を確認するため、操作実習と各細部の特徴を観察し、各種きのこの同定作業をしながら学びを深めた。また、採集したきのこを乾燥し、乾燥標本を博物館に収蔵した。この活動を通して、長野県レッドデータでは情報不足のカテゴリーにランクされているツガマイタケについてのデータも収集できたりした。

野鳥グループは日本野鳥の会諏訪支部の両角英晴氏に指導を依頼した。このグループに参加登録した市民は8名である。茅野市は低山帯、亜高山帯、高山帯と標高差が激しい多様な自然環境に恵まれている。そこに生息する、また訪れる野鳥の種類も多い。また、ある種については昔は見かけたが今は見かけない、あるいはその逆の場合もある、と言われる。しかし記憶にたよって論じるのではなく、きちんとした記録に基づいて論じなくては科学的ではない。そのためには記録が大切である。現在の野鳥の記録をきちんと残す。これは野鳥分野に限らず博物館の大きな使命の一つである。調査は博物館周辺に調査場所を定めたスポットセンサス、吉田山をめぐるコースと及び双子池をめぐるコースでのラインセンサスで行い、種数と個体数のデータを収集し、記録した。学習を深めるため、他に環境の違う場所での数回にわたる探鳥会、ツバメのねぐら観察会、茶臼山でタカの渡りの観察等を実施した。

実験工作グループはいわゆる自然ではないが、博物館は科学にも力を入れるようにという市の方針に従い開設したものである。指導は諏訪東京理科大教授、木村正弘氏に依頼した。参加メンバー8名は科学工作に興味のある人ばかりなので、指導者のもとで行う毎月1回の学習会に個々に開発したり工夫したりした科学工作の作品を持ち寄り、指導者に理論的説明をしてもらい、改善点を指摘してもらったりして作品の完成度を高めた。この定例学習会をベースに、その作品を博物館が子どもたちを募集して毎月実施する科学工作クラブやワクワク科学工作、また夏休みに実施する夏休み子ども教室で教材とし、参加メンバーが子どもたちに直接指導した。実際に子どもたちに教材を工作させると、子どもには理解しにくい点や難しい作業等がわかり、更に改良を加えることができた。その事によって理論と実践に強い市民研究員を育成した。また、サイエンスフェスタにグループで参加するなどして科学の面白さを広く市民にアピールした。活動は3年間で33種の科学工作作品を開発し、見本と工作レシピを博物館に蓄積した。科学に興味を持った子どもたちを育成しようという博物館の教育普及活動の大きな推進力になった。

(2) 第2期 2016～2018年度

活動を継続し蓄積していくことが重要な市民研究員事業だが、第1期3年が終了し第2期を開設するに当たり、諸事情で陸水グループと野鳥グループの継続が困難になった。そこで新たにシダ分野と天文分野を加え、第1期から継続した植物グループ、きのこグループ、実験工作グループと合わせて5分野(グループ)を開設した。また、第2期の途中であったが郷土文化研究家の飯田美智子氏から、茅野市の昔の市民生活について語る高齢者が急速に少なくなっていく現状に危機感を抱いている、市民の手で高齢者から昔ばなしを聞き取り、記録として博物館に残したいという申し出があった。総合博物館としては実施しなくてはならない調査研究分野である。手がまわらず実施されてこなかった分野で、ありがたい申し出であった。緊急性が高いということで、第3期の開設を待たずに、語り伝承グループとして第2期の3年目に開設した。したがって第2期は6分野(グループ)で開設したことになる。事業の進め方としては第1期と同様にした。指導者のもとで調査研究、資料収集保管という博物館活動に携わってもらいながら実践的にその分野の学びを深め、専門的な力もつけてもらうという方式である。結果として博物館活動も推進する、市民の教育普及も推進するという一石二鳥をねらった方式である。第2期の参加登録者は男子46名、女子33名の79名であった。50才以下の若年者は18名であった。みんな熱心に活動したが、それぞれ都合があり皆出席というわけには行かない。それでも全体で年間100日程度、延べ人数にして600～700人程度、3年間で延べ2000人の市民が博物館活動に有機的に関わってくれたことになる。

植物グループの指導者は諏訪教育会植物部会の岩波均氏、武居三男氏、白鳥保美氏、植物研究家坂口竣弥氏である。一部変更交代があった。参加登録者は23名。今期は小泉山を中心にしたフィールドワークと、そこで調査採集した標本の作成整理を行った。他に硫黄岳等で高山植物、霧ヶ峰高原の植物観察、環境保全研究所の収蔵庫見学等を行うなどして学習を深めた。

きのこグループは指導者に引き続き菌類懇話会の小山明人氏に就任してもらった。参加登録者は28名。活動は第1期と同様、午前中は周辺各地の野外での観察調査、午後は博物館で顕微鏡的观察や標本作成、一部DNA採取等を行った。また長野県内のきのこを理解するため鍋倉高原へ出掛け観察調査をした。リスト及び標本はエビタケ、タケリタケ等、長野県レッドデータ種を含む619点になった。また、10月には茅野駅近くの会場で2日間、100種以上の身近にあるきのこを展示した「きのこ展」を開催し、来場者が持ち込むきのこの同定もした。

シダグループは新規立ち上げのグループである。

指導者は信州大学名誉教授佐藤利幸氏に依頼した。参加登録者は11名。それまで茅野市八ヶ岳総合博物館にはシダ植物のデータ、標本は皆無であった。グループが行う調査、資料収集は、現代の茅野市周辺にはこのようなシダが生育していたという、後世に伝える貴重な資料になる。シダ植物について学ぶのは初めての市民ばかりなので、シダ植物とはどういう植物か、採集の仕方、記録の取り方、標本の作成方法等、基本的なことを学ぶことからはじめ、周辺各地へ出掛けての調査、博物館での標本整理と作成を行ないながら学習を深めた。また、信州大学自然科学館の収蔵庫で標本整理の仕方を学んだりした。市民でシダの調査活動を活発にし、シダのガイドブックを発行したりしている川崎市の自然調査団シダ班の人たちとの交流会を持ったりし、草の根のネットワークを広げた。今期で作成したリスト及び標本は252点だった。

天文グループは新規に立ち上げたグループである。指導は茅野市八ヶ岳総合博物館学芸員の若宮崇令と渡辺真由子が当たった。参加登録メンバーは20人、学生から高齢者までだが、他のグループと違って現役で働いている人が多い比較若い人たちである。星座についてよくわからないのでこれを機会に星の勉強をしたいという人もいるが、自分で天体観測したり天体写真を撮影したり、天文に詳しい人が多かった。星空の美しい諏訪地方はアマチュア天文家が活動する地として有名であったので流石である。その流れの中で今までは個人的活動であった市民が、これを機会に博物館に集結したという感があった。天文グループの活動内容は、毎月1回の定例学習会をベースに、博物館の事業である天体観望会、特別天体観望会、昼の星を見る会のサポート、サイエンスフェスタやエコフェスタ、活動展イベントデーでのモバイルプラネタリウムの公開、出前の星空教室の手伝い等である。定例学習会では毎月レポーターを決め天文話題の解説をしてもらい、全体の知識の共有化を図った。このような座学と、天体観望やプラネタリウムのシナリオ作りと投影公開等を市民研究員の手で実践をすることによって、天体望遠鏡の操作方法も含め学習を深めた。

実験工作グループは第1期からの継続で、引き続き諏訪東京理科大学の木村正弘教授に依頼した。参加登録メンバーは第1期からの継続者8名に3名が加わって11名であった。活動は第1期と同様指導者の指導をもらいながら科学工作教材の開発を進めた。開発した教材を使って実施する事業として、子どもたちを集めた科学工作クラブ、ワクワク科学工作教室、夏休みこども教室でグループ員が講師となって直接子どもたちの指導をした。また、毎年サイエンス

フェスタにもグループとして参加した。更に今期は磁石を使った教材として開発した「元気な鯛」等、短時間に簡単に作れる教材をたくさん博物館に用意し、博物館を訪れる団体の体験メニューの一つとして、利用希望があるとグループ員が指導に当たった。

語り伝承グループは前述のとおり、今期残り1年、中途であるが開設した。推進役として申し出のあった郷土文化研究家の飯田美智子氏に依頼した。参加登録メンバーは飯田氏を含め6名である。活動は活動計画や内容の打ち合わせ、聞き取り先への交渉、聞き取り録音、テープを聞きながら原稿起こし。活動としてはこの繰り返しである。早速行動に移し、計6名の高齢者から聞き取りをし、それを原稿にし、年度末に162ページの「諏訪地方の語り伝承 第一集」として刊行した。例えば戦争をした事実は歴史として残るが、茅野では戦時下の庶民の暮らしがどうか、どんな気持ちで過ごしたか等の具体的記録は残りにくい。その調査、掘り起こしに市民研究員が関わる地域の博物館として、地域の人々の暮らしや文化をこのような形で残すことのできるの、博物館として大切なことである。

(3) 第3期 2019～2021年度

幸い第2期のグループは指導者を含め継続開設することができた。第3期は新たに蘚苔類分野を扱うコケグループを立ち上げたので、7グループを開設した。八ヶ岳山麓は日本蘚苔類学会から「日本の貴重なコケの森」に指定されている。そのコケを見に訪れる観光客は多い。そのお膝元にある自然を扱う博物館でコケの資料が皆無では情けない。そこでコケグループを立ち上げ、市民の手でコケのデータと標本資料を蓄積しようとしたのである。7グループになったこともあり参加登録メンバーは100名ほどになっている。第3期は現在終了していないが、既存継続グループは第2期の活動を踏襲し、確実に調査を進め博物館資料蓄積の積み上げを行っている。また、博物館の主催する観察会や講座、教室で活躍している。ただ、今年度は新型コロナの影響で、博物館が休館になったり、活動制限が加えられたりしたため、リモートで学習を深めたグループあったが、全体的に活動は鈍った感がある。

新規開設のコケグループの指導者と活動内容を記す。以前信州大学には蘚苔類の指導者がいたが、現在は転勤して不在である。蘚苔類学会本部に問い合わせても長野県内に蘚苔類の研究者や指導者はいなかった。そこで遠路になるが全国の蘚苔類の調査をして実績のある、神奈川県平岡環境科学研究所の研究員平岡照代氏に指導をお願いした。遠路ということと年齢的なこともあり、直接指導は他のグループ

と違って隔月ということになった。参加登録者は 21 である。コケを学ぶのは初めてのものばかりなので 1 年目は青少年の森のコケを観察調査し、それを教材にしてコケについて学びながらリストと標本を作成した。コケの同定は顕微鏡を使わなくてはできないので、初めは戸惑った参加者もいた。登録台帳に登録して博物館に収蔵する標本については、メンバーで同定した標本、同定できない標本も含めて指導者のもとに送り、指導者に最終的な同定者になってもらった。活動 2 年目の今年度は、青少年の森とは環境の違う横谷峡遊歩道沿いのコケを中心に調べた。現在 2 年目が終了するところであるが、市民研究員が作成した茅野市周辺のコケの標本は 338 点になり、コケ登録標本台帳とともに博物館の収納箱に収納した。日本には 2500 種ほどのコケがあると言われている。八ヶ岳山麓は自然環境も多様で、コケの種数も多い。小さなコケの世界から大きな自然が見えてくると、メンバーは熱心な調査、採集、同定、標本作成、登録という活動をとおり、かなり力をつけてきているようだ。

6 今後の活動へ向けての私見

博物館活動を支える市民を育成し、博物館活動を活性化させ生涯学習に貢献しようという事業だが、今後について考えてみたい。考え方として、このまま継続、これで中断、市民研究員が育った分野から中止等、いろいろな選択肢が諸事情と絡み合っただけで考えられると思うが、私見を述べてみる。

2020 年度、第 4 期の活動にそのまま入ると、第 1 期から発足している植物グループ、コケグループ、実験工作グループは 10~12 年目の活動に入る。この 9 年間で市民研究員は立派に成長し、力をつけたと考えるべきである。市民研究員養成は多くの市民に博物館活動に有機的に係る活動を続けてもらおうとはじめた事業である。この 3 グループについての養成はできたと考えるべきである。終了ではなく新たな形で今後もその市民研究員には博物館活動を続けてもらうようにしなければならない。そうするには「仮称博物館を支える会」を組織し、養成の終わったグループには「支える会」の構成要素になってもらうようにする。各グループの指導者には支える会の中で各グループの顧問になってもらうのが良いと考える。つまり市民研究員養成後の受け皿となる「支える会」を作り、博物館を理解し、各分野で専門的な力をつけた養成後の市民研究員認定者を送り込む。「支える会」として博物館活動に関わってもらえるようにする。博物館は養成を終了するのではなく、期ごとに新たな 1~2 分野の市民研究員養成を続けていく。そして 3 期（小・中・高校のように）9 年間は養成期間、10

年目には「支える会」に送り込むというシステムを作る。その中で博物館は今後も常に新たな 5~6 分野の市民研究員の養成を続ける。総合博物館なので自然や科学分野ばかりでなくいろいろな分野で市民研究員の養成が必要になるので、少なくともあと 10~20 年は分野の新設に困らない。当面はまだ自然分野では扱っていない地衣類、甲虫、蝶、蛾、土壌昆虫、水生昆虫、ダニ、クモ、魚、地質、等々に分野を拡大する必要があるだろう。自然分野ばかりでは問題があるならば、歴史、人文の分野も加え、バランス良く進めればよい。市民研究員養成に力を入れる一方、「支える会」を博物館（行政）として支援する必要がある。具体的には「支える会」の構成分野の博物館活動、すなわち調査研究、資料収集保管、教育普及を事業委託するようにする。このようにして市民グループを行政として支援し育成し活用する仕組みを作ることが大切である。「支える会」は初めのうちは博物館から委託された活動をしているだろうが、やがて自分たちで地域課題に取り組んだり、市民レベルで色々なところと連携の輪を広げることになるだろう。その時、市民研究員は認定証を持っていることを誇りに思い、一層やりがい、生きがいを感じるだろう。そうなるように博物館は支援しなければならぬ。これによりこれから 10 年先、20 年先にはほどの博物館と比較しても引けを取らない地域博物館として、市民に支えられ、市民によって高められる、全国に誇れる博物館になる。また、このように博物館をベースに活動する市民は、いわゆる元気な市民である。元気な市民の多くいる町は元気な町である。まさに博物館が地域活性化の一翼を担うことになるのである。「支える会」と言っても多くの課題がある。組織、事務局、活動場所、活動資金、任意団体するか、NPO 法人にするか等々。それらを官民一体となってクリアすれば茅野市八ヶ岳総合博物館の未来、生涯学習都市茅野市は光り輝くものになる。

市民研究員の活発な活動によって蓄積される博物館資料についても触れておきたい。蓄積しておくだけでなく活用しなければ生きた資料にはならない。まずできることは、どんな資料を収蔵しているか、その情報を広く発信することである。どんな資料を蓄積している博物館であるかを広く知ってもらうことである。それが分かれば調査見学に来る等、広く活用されることだろう。次にこの調査研究の結果や収集資料を使った特別展を開催して周知を図ることである。館のどこかにミニ特別展コーナーを作り、月ごと、あるいは 2 ヶ月ごとに各グループが持ち回りでグループの活動成果を展示できれば、市民はいつ訪れても博物館で目新しい展示を観覧できることになる。マンネリ化を防ぐことができる。そして年 1~2 回、

ミニではない特別展をグループが中心になって開催できればよい。数年後、さらに現在より分野を広げた市民研究員の活動で調査研究や資料の蓄積が進めば、その成果に基づいた展示室の展示替えができる。逆に展示替えを見据えて今後の市民研究員の拡大分野を決めることもできる。

おわりに

茅野市には3つの登録博物館がある。それぞれ特化した特徴があり存在価値がある。そのなかで総合博物館には特化した柱がない。いや、柱がありすぎるというべきかもしれない。それで特徴が無いように見えてしまうのかもしれないが、どれも地域の学術、文化、教育のために欠かすことのできないものばかりである。その博物館に館を支える多くの市民が活発に出入りしていれば、それが館の大きな特徴になり、数ある柱を輝かすことになると思う。また、隣には公立諏訪東京理科大学がある。諏訪地方には多くの優秀な企業がある。博物館がハブとなった産・学・

民・官が連携して展開する博物館活動というものも考えてほしい。「支える会」も大きな役割を果たすことになるだろう。21世紀の時間がすごい勢いで流れているように感じている。その21世紀に博物館に求められるものは、IT、AIを用いて資料に光を当てた地域価値の向上と発信、地域課題解決の手法研究及び担い手の育成、活発なアウトリーチ的活動等を通じた地域密着性の向上を市民とともにやっていくことではないかと考えている。キーワードは市民の力である。生涯学習を生涯活動に結びつける場が博物館である。生涯活動の場を用意するのも博物館である。何度も書くが、博物館をベースに市民が活躍する町は元気な町である。茅野市八ヶ岳総合博物館は市民と協働で地域の学術、文化、教育の一翼を担う、茅野市になくってはならない施設として、ますます発展することだろう。期待しながら見守っていく。

(2021. 2・3)